



異質を生かす「授業づくり」…能都中「学び合い」への挑戦

1月26日、能都中で公開授業が行われ、本校からもO教頭先生、T先生、尾形の3名が出席しました。本校の卒業生たちの生き活きた姿をみることができるとも満足して帰ってきました。今回は、能都中の研究テーマに関する話題を取り上げ、小学校でもできることはないか、考えてみることにしましょう。

当日、中学校へ行くと「公開授業にあたって」と題する以下のような資料をいただきました。

※

能都中研究テーマ

「聴き合い、学び合い」を中心とする授業の創造 ～「聴くこと」を改善の柱として～

研究の構想

(1) 協同的な学びと学習形態の工夫

1時間に次のような活動を組み込んで授業を行い、仲間で聴き合う活動を大切にする。

「活動 コの字型」(読む・観察・計算・調査・真似・個人的思考・好奇心)

↓

「協同 小グループ」(男女混合の3～4名)

↓

・仲間で助け合う

↓

・意見をまとめるのではなく、個々の意見をすりあわせ、皆で共有する

「表現による分かち合い コの字型」

・仲間の発言から自分自身の考え方やあり方を吟味する

(2) 研究授業の充実

研究協議会では教師の指導技術や教材解釈について話し合うのではなく、「生徒がどこで学んでいたのか」「どこでつまづいていたのか」「生徒同士、生徒と教師、生徒と教材のつながり」など、生徒全員の学びが保障されていたか、具体的な場面や個人名をあげ事実をもとに協議する。

お願い

生徒の学びを保障するため、授業中の
生徒への声かけはご遠慮ください。

※

「学びの共同体」づくりの願いとは（講師のレジメより）

- ・他者と共に豊かな人間社会を築いていくことのできる力と心を育てることが使命
- ・一人残らず学びに参加させ、一人一人の学びを保障する
- ・多様な考えを認め、考えの差異から学び合い、生き方としての民主主義を学ぶ
- ・「学びの共同体」づくりは幸せづくり

授業の実際…3年生の数学「三平方の定理」(S先生)

0 授業デザイン

準備されていた資料は「指導案」とはよばず「授業デザイン」と書かれていました。内容は、授業者、単元、本時のねらい、本時の流れ、座席表でA4・1ページ。これだけです。

1 本時の流れ

①各球技ごとの対角線の長さについて考える。

持ってきた課題がおもしろかったです。部活を終えた3年生にとり、自分たちがずっと使ってきたコート
の大きさを比較して考えることは、それだけで好奇心をそそるでしょう。

②班ごとに、長さの大小を予想する。

班をつくり、コートの対角線の大きい順を予想します。一人一人はちがう予想を持っていましたが、こ
こでは班で一応まとめたものを出し合いました。

③計算によって求める。

実際に三平方の定理を使って対角線を求めます。この授業は少人数ではあるが等質になっていま
す。それは「学び合い」を深めるためです(後述)。この問題では実際の長さを扱うので計算が面倒に
なります。そこで計算機を使っていました。

④一般的な長方形、正方形の対角線の長さを求める式を導く。

⑤まとめる

⑥正三角形の高さの求め方を考える



②班で考えた順位を書く



③学び合いながら計算する



④⑤全体に発表してまとめる

授業の実際…1年生の数学「平面図形」(K先生)

1 本時のねらい

本授業「授業デザイン」の「本時のねらい」には以下のような文章が書かれていました。うちの小学校
における「習熟度別授業」のあり方を考える上でも、大変示唆に富む言葉だと思えます。

「学びの共同体を創る」ということは、学級において学習内容の習熟度にかかわらず、どの生徒も垣
根を持つことなく、クラスのすべての生徒と「学び合える」関係にあることが大切であると考えます。(中略)
本校数学科では習熟度別等による少人数指導体制ではあるが、第1学年では上述によりT・T指導によ
る一斉授業を試みている。(後略)

2 本時の流れ

①前時までの学習内容を確認する。

②課題「 75° の角度を作図する」を提示する。

③グループ活動の役割を確認する。

④各自で課題を考える。

⑤各自の考えを発表し交流する。

⑥グループの考えをまとめて、全体に発表する。

尾形の感想…異質な子たちが集まっているからこそ成り立つダイナミックな授業を目指すには、習熟
度別でクラスを分けるという発想はとてまなじまないのではないかと改めて思いました。

研究協議会では

今回の公開授業研究会では、研究協議会も「公開」されました。1年生数学の授業を見ていた教師たちが「子どもたちの姿の実際」に即して見たこと・考えたことを交流し合います。

私は、この部分が一番印象的でした。

中学校現場では教科が違うので、なかなか協同で研究を深めるということができにくいという現状があります。とくに能登のように小さな学校では、「その教科を担当する人が学校で一人だけ」ということも多く、教科の研究を進めるということが難しいんです。私が中学にいたころも、お互いに授業は見合いますが、教科の内容で云々…ということはありませんでした。

この「学び合い」の場合は、「研究の構想」にも書かれているように「生徒全員の学びが保障されていたか、具体的な場面や個人名をあげ事実をもとに協議する」というところに支点を絞っています。だからこそ、どんな教科担当の教師も研究協議会に主体的に参加することができるのです。

職員たちはある程度見る班を決めて子どもの様子を見ていたようです。個人名がどんどん出てきて、学び合いにはずれそうな子、それを気かけながらもなかなかいえない子、自分で解くことに一生懸命で友だちに目がいけない子、少しずつ優しくなってくる言葉…など、じっと見ていないとなかなか気付かない、「教師側からの気づき」が話されていて、とても気持ちのいい授業整理会でした。

小学校では、なかなかこうはいかないかも知れません。授業内容についても話をしたくなりますものね。その兼ね合いを付けながら、この「学び合い」の視点を取り入れていくことも可能かも知れません。

佐藤学さんの著書

最後に、この「学び合い」という授業を言い出した佐藤学さんの著書を紹介しておきます。

以下の感想は、当時、私が本を読んで書いたものですが、今は、少しちがう考えをもっているものもあります。でも、わざわざもう一度書き直す気がしないので、そのままにしてあります。いずれも、私が研究している仮説実験授業研究会仲間向けに書いたものなので、仮説実験授業との比較などが随所に出てきますのであしからず…。

とても長い文章なので時間があるときと興味がある人は読んでみてください。

■2004年～2005年の時の感想

●佐藤学著『習熟度別指導の何が問題か』(岩波ブックレットNo.612, 2004, 70ペ, 480円)

巷に流行る習熟度別指導。教師が加配され、学力向上フロンティアの研究校もあり、まさにまわり中に習熟度別ありきの様相を呈しています。

さて、この習熟度別学習。本当に子どもたちにとってプラスなのでしょうか？これから研究するのなら、やってみなくちゃわからないし、各校の研究成果に待つべきものですが、他の実験結果があるのなら、それを参考にして見るのも大切でしょう。

本書は、各国でおこなわれていた習熟度別指導が、けっして子どもたちのプラスにはならず、かえって複式の指導を進めてきたフィンランド等の国の方が、学習の力がついていると述べています。

フロンティア研究校のみなさん。選考実践をしっかりと学んでから、研究に当たってください。それが研究のあるべき姿ですね。

習熟度別クラスを子どもの判断に任せて分けることについては、

・「自己選択」を求めることによって「能力差別」の現実を喰

味にし、子どもと親の「自己責任」に帰着させる教師の責任逃れの意識が作用しているからとは言えないでしょうか。と言っています。

いろんなプリントを用意して時間を競わせるのは、本当に学校の仕事なのでしょうか？計算力と漢字力を高めるのが、学校教育として、まずいちばん大切なことなのでしょうか。

ボクは、学校という短い授業時間で、学問の楽しさを味わわせること。多様な意見があっているいろとノーマンが動かされることを知ることこそ、授業の意味があると思うのです。学校は塾ではありませんし、塾と同じ土俵で勝負する必要はないのです。そして、そう言い切れるだけの授業を、これからは仮説実験授業を通してやっていきたいと改めて思いました。

・学力向上のポイントは学力向上を直接的な目的にしないということです。学力向上を目的的に追求することは、土地も耕さず生育も促さずに収穫だけを算定し追求する愚かさにも似ています。授業の改革において追求すべきは学びの経験を豊かにし高めることであって、学力の向上は、その結果としてもたらされるものです。逆ではありません。(64へ)

●佐藤学著『教師たちの挑戦－授業を創る 学びが変わる』(小学館, 2003, 247ペ, 1400円)

本書の奥付けから、佐藤学氏のことを少し紹介します。

佐藤氏は 1951 年生まれ。現在、東京大学大学院教育学研究科教授です。「行動する研究者」として、全国各地の学校を訪問し、教師と協同して教室と学校を内側から改革する挑戦を行ってきたそうです。

教室で…「活動的で協同的で反省的な学び」の実現
校内で…教師同士が育ち合う「同僚性」の構築

地域との連携においては…保護者が授業の創造に参加
する「学習参加」の実践

を推進し、「学びの共同体」という学校の未来像を提起して学校改革を推進している人です。

佐藤氏の言う「学び」とは、「テキスト(対象世界)との出会いと対話であり、教室の仲間との出会いと対話であり、自己との出会いと対話である」(本書 13 ペ)と定義され、「学びは、対象世界との対話と仲間との対話と自己との対話の三つの対話的实践によって構成されているのであり(学びの三位一体論)、『活動』と『協同』と『反省』の三つで構成される『活動的で協同的で反省的な学び』として遂行されている」(同書 13 ペ)という視点に立っています。

本書では、主に、佐藤氏が上記の視点で協同で研究してきた学校の授業や研究の様子がいくつか紹介されています。

・黒板と教卓を中心に多数の子どもが一人ひとり一方向に並べられた机で学ぶ教室、教科書を中心に所与の知識や技能を習得させテストで評価する授業は、日本を含む東アジアの国々を除けば、すでに博物館に入っていると言っても過言ではない。(7ペ)

これでいうと、わたしたちが行っているほとんどの授業は、もう博物館に入っているのですね。ごみすて場じゃなくてよかったけど…。

・子どもを「主人公」にする授業は多いが、教師が「主人公」として生きていない限り、子どもを「主人公」とする授業はヤラセでしかない。- 中略 - 私たちは、子どもたちの学びをいつも「将来のために」限定したり、あるいは「発達のために」限定してしまっているのではないだろうか。今の学びを充実させ、今を幸せに生きることなしに将来の学びも幸せもない。(本書122ペ)

そのとおりですね。これには賛成です。将来のためにだけ学ぶわけではないですよね。「今、その時」が大切なのだと思います。仮説実験授業をしている時には、こういうスタンスでいられるのですが、いざ、他の教科となると、「教科書にあるから勉強せい」「将来の為じゃ」と思ってしまふんですね。

学習参加の例として、新潟県の小千谷市の小千谷小学校の実践が取り上げられています。丁度、震災があった市です。そこでは、ゲストティーチャーについて、次のように述べられています。

・とかく教師は、学習参加の準備として親との事前の打ち合わせに時間をとられがちだが、その結果、参加できる親が限定されては本末転倒である。一部の親の参加に限定されるゲスト・ティーチャーの方式も慎重でなければならない。一人でも多くの親が、対等に気持ちよく協力し参加できるように配慮することが何よりも大切である。(本書151ペ)

前任校では、道徳の研究をきっかけとして GT の導入に踏み切り、日常的に地域の方が学校に来て下さる態勢ができました。しかし、特に保護者をお願いするときには、「だれをお願いするのか」というような部分で、いろいろと悩んでいました。その悩みを発展的に解決するのが、この「学習参加」という視点かも知れないと思いました。今度、前任校の学校長に、そういう話もしてみたいなと思います。今の自分の勤務校には、そういう素地はまだなさそうですから。

●大瀬敏昭著者代表・佐藤学監修『学校を変える一浜之郷小学校の5年間』(小学館,2003, 236ペ, 1700円)

浜之郷小学校の 5 年間に綴った記録です。何人もの職員が書いています。以前まとめられた『学校を創る一茅ヶ崎市浜之郷小学校の誕生と実践』では、少ししか触れられていなかったこと一例えば「職朝がない」「朝読書をしている」「校務分掌が一役一人制」「校内研究授業が多い」「全校集会もない」などの要素一が、実際の学校創りにどう影響してきたのか、伝わってきます。

ここまでくると、決して平坦な道ではなかったのだなあと思います。こういう学校に少しでも近づくためには、校長の強力なリーダーシップとそれを理解する職員がいなくてはいけません。一人で出来るものではないのです。

わたしは、これを読んでいて、前校でのことを思い出していました。数年前、騒々しかった小学校は、この 2、3 年で本当にしっとりしてきた気がします。それは道徳がどうのこうのということではなく、子どもにとって(このこと)はどうなのかを考えることが多かったり、全職員と一緒に学ぶ姿があったことだったりします。

もうしばらく、浜之郷小学校と佐藤学さんのことについて、学んでいくと思います。

●佐藤学著『「学び」から逃走する子どもたち』(岩波ブックレットNo.524, 2000, 62ペ, 480円)

●佐藤学著『学力を問い直す－学びのカリキュラムへー』(岩波ブックレットNo.548, 2001, 62ペ, 480円)

『「学び」から逃走する子どもたち』では、まず最初に、最近の少年犯罪の増加を「創られた危機」であると指摘しています。今の子どもたちがマスコミを騒がす状況は「いずれも一部の子どもの現象であることに注意する必要があります」が、不登校に関しても「年間 30 日以上学校に通わない子どもが学齢児童の 1 %という国は、世界的に見てまれであることも知っておく」ことが大切だといっています。

そして、問題はむしろ「少なくとも 7 割の子どもたちを

襲っている深刻な危機」であり、それは「<学び>からの逃走」だといいます。「一たび<学び>から逃走した女の子は二度と戻ってこないというのが、高校教師の熟知している現象」であり、それが日本が「先進国諸国の中で学力の男女差が拡大する例外的な国の一つ」になっているといいます。

また、「レベルを下げて教え」れば、わかるはずだというのは、「多くの教育者が陥っている誤謬の一つ」であり、最近日本で流行っている習熟度別指導は、世界では廃止される傾向にあることも教えてくれます(これについては、同じ著者が『習熟度別指導の何が問題か』で詳しく書いています)。

そのためには、「勉強」から「学び」への転換を実施する必要があります、そのための 3 つの課題も示されています。その学びを実現している学校の一つが茅ヶ崎市立浜之郷小学校なのだと思います。

『学力を問い直す』は、学力問題とは何なのかを、広い視野で見していきます。

この本からもたくさんのが学べます。が、ここでは二つの文を紹介します。

- ・文部科学省の推進する「少人数指導」を推進するならば、多くの学校で教師の半数近くが非常勤講師で占められてしまいます。そうなれば、「学力の低下」どころか「学校の解体」を導いてしまうでしょう。(56ペ)
- ・子どもの学力を向上させる上で、何よりも大切なことは子ども自身を創造的で探求的な学び手として育てることです。そして、子どもを良い学び手として育てるためには、子どもを育てる親や教師自身が良き学び手として成長し行動することが何よりも大切です。(57ペ)

学力が 2 極化していると感じている教師が 6 割以上と、最近の新聞に出ていました。習熟度別指導は、新たな格差と劣等感を生むだけです。なんとしても反対していかなければ、子どもたちはますます学びから逃走して、決して戻ってこなくなる—そう決意させられました。「うちは学力向上フロンティアの研究校だから…」と言っている場合ではないのです。そういえば、習熟度別指導にたよらない学校の姿が、元日の「北陸中日新聞」に出ていました。やればできる、今ならまだ間に合う…。

●佐藤学著『授業を変える 学校が変わる』(小学館, 2000, 238ペ, 1900円)

今年度、追っかけた佐藤学さんの理論本です。次の本と共に、一気に読んでしまいました。とてもおもしろかったです。

主体性について、気に入った部分を書き出してみます。

- ・授業における「主体性」神話は、大正自由教育において成立し、戦後の新教育において広まっている。(20ペ)
- ・「主体性」神話とは、教師との関わりや教材や学習環境と切り離して、子どもの関心や意欲や態度など、子ども

自身の性向に「主体性」を求める神話であり、子どもの内面の「主体性」によって遂行された学びを理想化する神話である。

- ・欧米では、神、自然、国家、真理、民衆の意志など、自己を超越した存在の従属者になることによって「主体性」が獲得されると考えられている。学びの「主体性」が「謙虚さ」に求められるのは、このような「主体＝従属」という思想が根底にあるからである。
 - ・わが国の「主体性」は、むしろ、あらゆる従属関係や制約から自由になって自分の内面にそって行動することを意味している。このような「主体性」は「わがまま」ではないのではないか。さらにいえば、この「主体性」は、従属すべきものを喪失した「宙づりの主体」でしか、ありえないのではなだろうか。(22ペ)
 - ・「主体性」神話に冒された授業は、「はい」「はい」と活発に活動を展開してはいるものの、子どもが学んでいる内容は雑然としていて質的に貧弱であり、子どもの育ちも表面的で貧しいものになっている。(24ペ)
- また、授業の中の「ハンドサイン」をみるとがっかりすることも述べています。こういう先生は、思考や意見の表明を明晰に行うべきだと考えていることがおおく、そんな教師は、
- ・子どものたどたどしい発言のすばらしさを理解することができない。微妙に揺れる曖昧模糊とした思考や矛盾や葛藤をはらむ複雑な感情のすばらしさについて理解することができない。(28ペ)
- のだといいます。

主体性についていえば、仮説実験授業が、本当の意味での主体性を求めている授業です。子どもに迎合することなく、子どもが主体的に考えるための手だてを授業書という形で与えています。仮説実験授業に即して考えることで、教師は、より創造的・主体的になっていきます。

●佐藤学著『教育改革をデザインする』(岩波書店, 1999, 201ペ, 1900円)

これも佐藤氏の理論本です。

授業や学校の改革が主な話題だった前掲書『授業を変える…』と比べ、本書は、日本の教育改革にもものを申しています。その分、前掲書よりやや固い内容となっていますが、わたしにとっては、この本が佐藤さんの本の中で一番おもしろかったです。

最近はやりのカウンセラーについても、その導入に疑問を投げかけながら、「教育の危機的減現象を精神分析や臨床心理学によって心理化し私事化して認識し対処するのは、それ自体が、今日の教育改革の深刻な病理現象である。いじめ、不登校を始めとする教育の危機的現象のほとんどは、心理学的な問題ではなく、社会的な問題であり制度的な問題である」と言い切っています。

教育も社会的な問題であり、日の丸・君が代の強制や教職員の人事考課制度なども、子どもたちに大いに影響するのです。なぜなら、そういう制度を押しつけようと

する教育行政のもとで、教育せざるを得ないのでから。

佐藤さんのいいところは、現在の教育改革にものを申しながらも、しっかりとした改革のための対案を示していることだけでなく、今現在の状況でも、各教室や各学校でやることはあるではないかと、身近な部分での具体策も示してくれていることです。その代表作が『授業を変える…』であり、その改革の成果が一連の茅ヶ崎市立浜之郷小学校の著作なのです。

何はともあれ、「教師の職業時間の7, 8割を専門家としての仕事にあてられるように学校の機構を単純化する必要がある(本書, 135 ペ)」ことは確かであり、そのための手だてを早く取ることが大切です。

■2009年の時の感想

●藤田英典編『だれのための「教育再生」か』(岩波新書, 2007, 212p, 735円)

もじどおり、今の教育改革の流れは、いったいだれのためなのか…を問題意識として教育の専門家たちが書いた本です。

著者は、編者の藤田氏以外に、東大教授・佐藤学、教育評論家・尾木直樹、弁護士・中川明、早大教授・西原博史、同じく早大教授・喜多明人の各氏です。中川氏と喜多氏の文章を読むのは多分初めてなので、どんなことを研究している人かなと思いつつ読みました。

ただ、喜多さんは、昨年の秋に県教育研究集会の記念講演の講師として講演されており、私もその場にいましたので、話は聞いたことがあります。

佐藤学氏は、教育現場の点数主義を乗り越えた数値絶対主義に対して、次のように警鐘を鳴らします。

・数値によって競争的な環境を生き抜き、数値によって外部からの信頼と承認を受けることが目的になっています。言い換えれば、人々はもはや「数値」しか信頼しなくなったのです。そこには人と人との関係における信頼の崩壊という深刻な問題が横たわっています。(71p)

しかし、こう憂える佐藤氏が指導している小中学校では、「学びの共同体」づくりに成功して、子どもたちが生き生きしている学校もあるようです。まだまだ捨てたものではありません。「数値」を相対化する教育実践がわたしたち教師に求められているようです。

また、喜多氏は、学校安全という面から、子どもへの厳罰化について書いています。

・ゼロ・トレランスの基本的な問題の一つは、安全と人権とを対立軸に置き、安全のためには人権を制約できるという考えを前提にしていることです。しかし、本来、安全や安心自体が市民、子どもにとって欠かせない人権であったはずで、安全で、安心できる生活の確保と学校内での生徒の人権、学習権の保障は量率を目指すべきものであり、仮に両立できない現実があるとしたら、それぞれに人権としての本質を損なわない方法で

相互の調整を行うのが本筋であったはずで。(96p)

「ゼロ・トレランス」とは「寛容なし」という意味の言葉です。もともとは産業界の言葉で、少しでも不良品をださないという品質管理の言葉でした。それが今、「あれら子どもは学校に来させるな」的な論調で広がっているとしたら、その不良品とされた子どもたちはどうすればいいのでしょうか。

・いまの子どもたちの多くは現象的にはわがままに見えても、実は「我がまま」「自己中心」から「問題行動」に走るのではなく、「我がまま」の我を見失い、中心となるべき「自己」を見いだせないストレスがそうさせているのです。(108p)

喜多氏のような目で子どもたちを捉えてあげることがますます必要になってきています。

本書の最後に、「提言・わたしたちが求める教育改革とは」という章が設けられています。

それを引用して、紹介を終わります。

<ただちに中止すべき施策>

全国一斉学力テスト／教員免許法更新制／教師の階層化／寛容なき厳罰主義／国家による教育統制の強化

<見直すべき法律や施策>

06年教育基本法／教育の市場化／学校選択制

対案もすっかり書かれています。

そして、その対案が実現しつつある学校では、地域・子ども・学校がしっかりと連携して、子どもたちを育てているのです。

●ネル・ノディングス著『学校におけるケアの挑戦』(ゆみる出版, 2007, 350p, 2800円)

サークルで紹介されていたので手に入れて読んでみることにしました。訳者は、東大の佐藤学氏です。佐藤氏といえば「学びからの逃走」とか「学び合いの授業」などの言葉で有名です。最近の研究発表会でも、佐藤氏の「学び合い」をキーワードにした実践が結構あるようです。

原著は1992年に発行されています。

「学校教育の目的と内容と方法を一新する提言を行っている」(佐藤氏)という本書は、文字通り「ケアリング」というキーワードで教育のあらゆる世界を切り取って話しています。

私も大卒この発想に賛成です。教育がそうならたらしめたいと思います。

「ケアリング」を大切にしたいカリキュラム…それは「仮説実験授業」です。

子どもたちが、自らの好奇心をくすぐられ、「論敵は恩人」という発想で討論を楽しみ、いつのまにか学級の子も子どもたちが仲良くなっていく。こんな授業が広がれば、お互いのよさに気づき、その授業書を作ってくれた人へのケアだけでなく、こんな言葉も飛び出すのです。

「先生、来年も、この授業をしてあげてください」

まさに、他者へのケアリングではありませんか。